

上田由紀子(山口大学) 内堀朝子(日本大学)

ykueda@yamaguchi-u.ac.jp uchibori.asako@nihon-u.ac.jp

要旨

日本手話をはじめとする手話言語においては、副詞が非手指標識として他の手指表現と同時に現れることが多いことが広く知られている(Sandler and Lillo-Martin 2006, 岡・赤堀 2011)。本発表では、日本手話において、VP 様態副詞の非手指標識が動詞と同時に現れている、すなわち波及 (spreading) しているとき、動詞句内の語順が一定の制約を受ける事実を観察し、VP 様態副詞を構成する二つの形態素のうち、非手指形態素が波及するには、VP 様態副詞と波及を受ける語が線状的隣接性条件を満たすことが必要であると指摘する。さらに、これらの事実から、日本手話において VP 様態副詞を含む動詞句内で目的語が空となっている場合、動詞が語彙要素であれば項削除が、動詞が代動詞であれば動詞句削除が生じているという分析を提案し、また波及の条件としては構造的階層性も関与していることを示唆する。

1. はじめに：日本手話の基本特性

本発表では、日本手話における VP 様態副詞の外在化について議論する¹。特に VP 様態副詞が非手指標識として動詞に波及 (spreading) する際には、線状的隣接条件が必要であることを主張する。また、日本手話において、一見、動詞残留型の動詞句削除が生じていると思われる構文では、動詞が語彙動詞の場合は項削除が関わっていることを示す。さらに、VP 様態副詞の非手指標識の波及には、隣接性だけでなく構造的階層性条件も関与していることを示唆する。

1 節では、本研究に関連する日本手話の基本特性をまとめる。まず、日本手話は主要部後置言語の一つで、基本語順は SOV であると言われている(1)。話題要素がある場合は、話題化を示す非手指要素を伴って、文頭に現れる。また、かき混ぜが起こらないこともよく知られている(2-4)²。

- (1) (_____{TOP}) _____{NM} 丁寧
 佐藤 昨日 丁寧 車 洗う PT_{佐藤}³
 ‘佐藤が (／は) 昨日丁寧に車を洗った’

- (2) (_____{TOP}) _____{NM} 丁寧
 *昨日 佐藤 丁寧 車 洗う PT_{佐藤}

¹ 手話言語において、日本語訳の‘丁寧に’にあたるような様態副詞的機能を持つ手話表現を／副詞／と呼ぶべきか否かは慎重な議論を要するところであるが、本発表では、便宜上／VP 様態副詞／と呼ぶ。(なお、以下の例文では、動詞句内に現れる行動 RS (Referential Shift)の分布について、紙面の都合上、表記を省略している。)

² 語順に関する事実は複雑なところもあり、さらなる観察が必要である。

³ PT は「指さし」を表し、文末に位置する指さしを「文末指さし」と呼ぶ。(1)では、文末指さしとして、話題要素／佐藤／を指示する指さしが現れている。文末指さしは、一文の終わり(言い切り)を示し、指示対象は、主語または話題要素(時間表現を除く)であるとされている(Uchibori (2016), 市田(2005), 岡・赤堀(2011), 原・黒坂(2013), 鳥越(1991) など)。

‘昨日佐藤が（／は）丁寧に車を洗った’

- (3) (_____{TOP}) _____{NM 丁寧}
*PT 車 佐藤 昨日 丁寧 洗う PT 佐藤
‘この車を佐藤が（／は）昨日丁寧に洗った’

- (4) _____{NM 丁寧} (_____{TOP})
*丁寧 佐藤 昨日 車 洗う PT 佐藤
‘丁寧に佐藤が（／は）昨日車を洗った’

次に、日本手話は空項を許す言語と言われている。先行詞が分かる文脈があれば、空主語(5)も空目的語(6)も許される。

- (5) パン 食べる
‘パンを食べます’ (松岡 2015:58(4a))

- (6) a. TAROO [_{NP} CAR] WASH. b. HANAKO [_{NP} Δ] WASH NEG.
‘太郎が車を洗った。花子は e 洗わなかった’ (Sakamoto and Matsuoka (2016: 1a-b))

また、手話言語では、副詞的な働きを持つ述語修飾機能が非手指標識として現れることが多いことも広く知られている (Sandler and Lillo-Martin 2006: 61)。日本手話でも同様のことが観察でき、(7)では、VP 様態副詞が非手指標識として、動詞に相当する手指要素と同時に現れている。

- (7) _____{TOP} _____{NM 丁寧}
佐藤 昨日 車 洗う PT 佐藤
‘佐藤は昨日車を丁寧に洗った。’

2 節では、VP 様態副詞的機能をもつ非手指標識がこのように動詞に相当する手指要素と同時に出現する際の条件を考察する。

2. VP 様態副詞の非手指形態素の波及と、様態副詞・目的語・動詞の語順：隣接性条件

日本手話の VP 様態副詞は、上記(1)でも見たように、（少なくとも）二つの形態素、この場合、手指形態素／丁寧／と 非手指形態素／_____{NM 丁寧}／（口角を引き締めて口を閉じる）から成っていると考えられる(8)。

- (8) _____{TOP} _____{NM 丁寧}
佐藤 昨日 丁寧 車 洗う PT 佐藤
‘佐藤は昨日車を丁寧に洗った’

興味深いことに、手指形態素／丁寧／は任意に省略することができ、その場合、非手指形態素／__NM 丁寧／は必ず動詞と共に現れていなければならない(9)。

- (9) ______{TOP} * (______{NM} 丁寧)
佐藤 昨日 車 洗う PT 佐藤
'佐藤は昨日車を丁寧に洗った。'

さらに、手指形態素／丁寧／と非手指形態素／—_{NM} 丁寧／の両方が現れている場合、非手指形態素は後続の動詞に波及する(10)。

- (10) _____TOPIC _____NM 丁寧
佐藤 昨日 車 丁寧 洗う PT 佐藤
'佐藤は昨日車を丁寧に洗った.'

ここから、(9)の動詞と同時に現れている非手指形態素／—_{NM 丁寧}／は、動詞の左に位置した空（null）の手指形態素／丁寧／から、波及してきたものと考えられる。同時に(9)は、日本手話の VP 様態副詞は、手指形態と非手指形態素の二つの形態素から成っているが、二つの形態素が共に空であるという場合は存在しないことを示唆している。つまり、Sakamoto & Matsuoka (2016)も指摘しているように、日本手話では少なくとも VP 様態副詞単独の空副詞（null adverb）は許されないと見なすことができる（この点については、3 節でさらに議論する）。

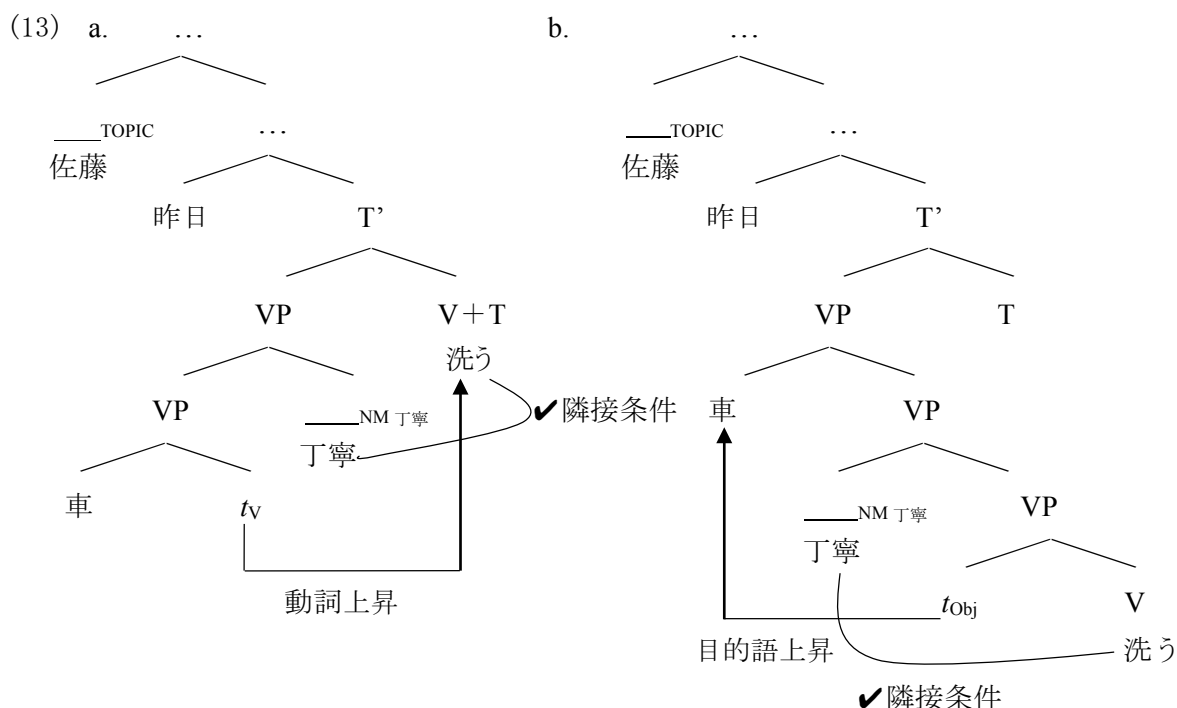
さらに VP 様態副詞の手指形態素が空の場合は、非手指形態素のみを、動詞など他の要素とは別に単独で表出することはできない(11)。従って(9)は、このような波及が義務的であることも示している。この事実は、非手指形態素が拘束形態素であると仮定することにより、説明可能である。

- (11) _____TOPIC _____NM 丁寧
 *佐藤 昨日 車 洗う PT 佐藤
 ‘佐藤は昨日車を丁寧に洗った。’

非手指形態素の波及の条件としてさらに仮定できるのは、線状的隣接性である。(10)と(12)の文法性の対比が示すように、手指形態素／丁寧／が現れている場合、VP 様態副詞の二つの形態素（／丁寧／および／___{NM 丁寧}／）と、非手指形態素／___{NM 丁寧}／を同時に伴う動詞／洗う／との間に、目的語が介在していると非文となる(12a, b)。つまり、手指形態素と動詞が隣接していなければ、非手指形態素は動詞に波及できないと考えられる。

- (12) a. ____TOPIC ____NM 丁寧 ____NM 丁寧
 *佐藤 昨日 丁寧 車 洗う PT 佐藤
- b. ____TOPIC _____NM 丁寧
 *佐藤 昨日 丁寧 車 洗う PT 佐藤

つまり、日本手話において、(10)のような場合に隣接性条件を満たして波及が生じる限り、次のいずれかの派生が起こっている必要がある。(i) VP 様態副詞が VP の右に付加し、さらに動詞が副詞よりも高い位置にまで上がり、動詞の元位置と上がった位置の間に他の主要部が介入しない(13a) (V-T 動詞上昇)。あるいは (ii) VP 様態副詞が VP の左に付加し、目的語左方転移または目的語上昇が生じている(13b)。なお隣接性条件のみを考える限りにおいては、(ii)については、現段階では動詞上昇の有無は関係しない（動詞の高さ（位置）に関しては、3 節で議論する）。(10)と(12)の対比は、上記(i)-(ii)のいずれの派生が起きたとしても、隣接性条件をもって説明できる。



上記を踏まえ、いま一度、(1)の文、すなわち VP 様態副詞の手指形態素は現れず、動詞に非手指形態素のみが波及している（動詞と同時に現れている）文（(14) として再録）に戻って考えてみよう。(14)=(1)は一見、非手指形態素だけが存在するかのように見えるが、波及の際に隣接性を守っているはずであるので、(13a)または(13b)のいずれかの派生により、音形のない VP 様態副詞から、その非手指形態素が隣接性条件を満たす形で、動詞へと波及しているとみなすことができる。

- (14) TOPIC NM 丁寧
- 佐藤 昨日 車 洗う PT 佐藤 (=1))

ここでは、二つの形態素からなる VP 様態副詞が、手指形態素の音韻素性が任意でゼロとなり、非手指形態素については拘束形態素であるため、隣接性条件を守って波及して出現している。上の(9)で見たように、(14)においても非手指形態素は動詞と共に必ず現れなければならない、二つの形態素が共に空とはなっていない。つまり、やはり日本手話において（少なくとも VP 様態副詞では）音形のない空副詞は存在しないと考えられる。

まとめると、VP 様態副詞の外在化の可能性は、(i)二つの形態素である手指形態素と非手指形態

素の両方を表出する, (ii)両方の形態素を表出し, かつ非手指形態素を動詞に波及させる, (iii)手指形態素は表出せず, 非手指形態素のみを動詞に波及させる, これら三通りと観察される。

次の3節では, (iii)の派生が削除現象を伴っていると思われる文においても同様に見られるかどうかを確認し, そこから動詞句削除と項削除の二つの削除分析の適用可能性を検証する。

3. VP 様態副詞の非手指形態素の波及と, 階層性条件

以下では, 削除現象を伴っていると思われる文において, 代動詞／やる／が現れている場合, VP 様態副詞の二つの形態素が共に空となる場合がある事実を観察し, その事実は, 語彙動詞が現れている場合と異なり, 項削除分析ではなく, 動詞句削除分析によって説明できることを指摘する。さらに, 2節で提案した「VP 様態副詞の非手指形態素の外在化における隣接性条件」に加えて, 構造的階層性の条件も必要であることを, 空目的語を含む文における VP 様態副詞解釈の事実に基づいて提案する。

まず, 次の(15)の文脈において, 空目的語を含む文(17a, b)のそれぞれを, VP 様態副詞を伴う文(16)に続けて発話すると, (17a, b) の動詞に VP 様態副詞の非手指形態素が波及していなければ, 文の解釈には‘丁寧に’が含まれないという事実が観察される。つまり, 日本手話においても音声日本語同様に, VP 様態副詞は単独で削除できないことが分かる (Oku (1998)ほか)。

- (15) 【文脈】田中と佐藤は同じタクシー会社で働いているタクシードライバー。この会社では,
ドライバが, 車を清掃することになっている。

- (16) ______{TOPIC} ______{丁寧}
田中 昨日 車 丁寧 洗う PT_{田中}
‘田中は昨日車を丁寧に洗った’

- (17) a. ______{TOPIC} ______{丁寧}
佐藤 今日 洗う PT_{佐藤}
‘佐藤は今日車を丁寧に洗った’ (解釈に, ‘丁寧に’の意味が, 含まれる)

- b. ______{TOPIC}
佐藤 今日 洗う PT_{佐藤}
‘佐藤は今日車を洗った’ (解釈に, ‘丁寧に’の意味が, 含まれない)

2節で提案した隣接性条件に従えば, (17a, b) の解釈の違いが示すところは, (17a) では, VP 様態副詞が動詞句構造中に存在しているが手指形態素の音韻がゼロ形で, 非手指拘束形態素が動詞に波及して外在化している, ということになる。同時に, この発話においては目的語は空になっている。この事実を分析するには, 二つの可能性が考えられる。まず, (A) 動詞句内の要素のうち, VP 様態副詞が上述の理由で外在化されておらず, 目的語のみ項削除されている, すなわち項削除分析である。この場合, 動詞が動詞句より上に移動しているかいないかは, 現段階では定かではない。もう一つの分析可能性としては, (B) 上述の音形を持たない VP 様態副詞と目的語も全て含めて, 動詞

句が一括で削除されている，すなわち動詞句削除分析が考えられる。この場合は，動詞は残留しているので，動詞句の外に移動していると仮定する必要がある。

以下では，(17a) に対しては可能性 (A)の項削除分析が妥当であることを示す事実を検討していく。また，可能性 (B)の動詞句削除分析は，(17a) のような語彙動詞が残留している時には当てはまらず，代動詞の場合においてのみ適用できることを指摘する。

さて，先行文(16)の後に続けて，(17)の語彙動詞／洗う／を，代動詞／やる／に変えた文(18)を発話した場合，どうなるだろうか。驚くべきことに，VP 様態副詞の非手指要素が代動詞／やる／に波及していなくても，解釈に／丁寧／が含まれる読みが許される。

(18) ______{TOPIC}

佐藤 今日 やる⁴ ない

意味 1 = ‘佐藤は今日車を洗わなかった’ (解釈に，‘丁寧に’の意味が，含まれない)

意味 2 = ‘佐藤は今日車を丁寧に洗わなかった’ (解釈に，‘丁寧に’の意味が，含まれる)

(18)に意味 2 の解釈があることは，(18)のさらに後に続く文として／PT_{佐藤} 適當 洗う／（‘佐藤は適当に洗った’）などと言えることから保証される。

意味 2 が可能である事実は，その場合，仮に日本手話が目的語空代名詞を有すると考えたとしても，2 節で議論したように空の VP 様態副詞は存在せず，上で見たように VP 様態副詞を単独で削除することもできない以上，VP 様態副詞／丁寧／と目的語／車／を含む動詞句全体が，一括で削除されていることを示している。従って，代動詞／やる／が使われている(18)は，上で述べた分析の可能性 (B) の動詞句削除によって派生されていると考えられる。

この動詞句削除分析は，一般に仮定される代動詞の構造的位相からしても自然な説明と言える。日本手話の代動詞／やる／を，音声英語の代動詞 *do* や，音声日本語の「食べさえした」「行きもしない」などの *sur-*と同じ働きをするものと考えよう。すると日本手話の代動詞／やる／は，T（もしくは T そのものかどうかに関わらず，TP 内の主要部）に直接挿入され，動詞句より構造的に高い位相に存在していると仮定することができる。

さらに，この分析の下では，(17a, b)で観察したように，語彙動詞／洗う／の場合には，VP 様態副詞の非手指形態素の波及可能性と副詞解釈との関係が，(18) の代動詞／やる／とは異なっているという事実が，容易に説明される。もし，語彙動詞が，代動詞／やる／と同じように動詞句より高い位相に構造上存在しているならば，VP 様態副詞と目的語を含む動詞句削除が生じたと考えれば，動詞に VP 様態副詞の非手指形態素が波及していなくても，(18)の意味 2 と同様に，副詞を伴う解釈が可能なのはである。しかしながら，それが不可能，つまり／洗う／などの語彙動詞は，非手指形態素の波及がなければ VP 様態副詞の解釈を含むことはないということは，／洗う／などの語彙動詞は動詞句内に留まっていると考えざるを得ない。つまり，VP 様態副詞の非手指形態素が波及している語彙動詞は，VP 様態副詞が付加している動詞句の中に存在していると言える。従って，上で検討した(13a, b)二つの派生のうち，動詞上昇のない(13b)の派生が(14) (= (1))の文にも起き

⁴ /やる/は，語彙動詞としても用いられる。例えば，／スポーツ／／やる／／PT₂?／（‘(友達などと遊ぶときの誘い文句として) スポーツやる?’）など。

ていると仮定される。

以上よりさらに、非手指形態素の波及の線状的隣接性以外の条件に関して、以下のような示唆も得ることができる。もし隣接性条件だけを満たせば波及が許されるならば、(18) 代動詞／やる／の場合、VP 様態副詞が動詞句の右に付加していれば、動詞句削除の前に条件を満たしているため、副詞の非手指形態素が波及するはずである（その後、VP 様態副詞と共に動詞句が削除されても、代動詞の上に波及した非手指形態素は削除領域の外に存在する）。しかし事実は、代動詞／やる／には非手指形態素が伴わない。一方、動詞句内に留まると仮定される語彙動詞には、隣接性条件を満たせば動詞句に付加している VP 様態副詞から非手指形態素が波及することができる。ということは、非手指形態素の波及には、副詞と動詞の間で階層性条件も関与していることを意味する。言い換えると、VP 様態副詞が動詞よりも構造的に高い位置にあれば、副詞の非手指構成素が動詞へと波及できる。代動詞／やる／は構造的に動詞句より高い位置にあるため、この階層性条件を満たさない。従って、VP 様態副詞からの非手指形態素の波及が許されないと考えられる。

以上、本発表で観察した VP 様態副詞を含む動詞句内の要素間の語順をめぐる事実は、日本手話における削除現象の統語分析に際して、VP 様態副詞の非手指形態素の波及の条件を考慮に入れる必要があることを示している。本発表で提案した、波及に関する線状的隣接性条件と構造的階層性条件が妥当なものだとすれば、現時点では以下の結論が導かれる。すなわち、日本手話の VP 様態副詞を含む動詞句内に現れる空目的語は、動詞が語彙動詞である場合は項削除によって派生され、動詞が代動詞／やる／の場合は動詞句削除によって派生されるものである。

参考文献

- Oku, Satoshi. (1998) *A Theory of Selection and Reconstruction in the Minimalist Program*. Doctoral dissertation, University of Connecticut, Storrs, USA.
- Sakamoto, Yuta and Kazumi Matsuoka (2016) “Missing objects in Japanese Sign Language,” paper presented at WAFL 12. Central Connecticut State University, USA.
- Sandler, Wendy and Diane Lillo-Martin (2006) *Sign Language and Linguistic Universals*. Cambridge, UK: Cambridge University Press.
- Uchibori, Asako (2016) “What Does Clause-final Finger Pointing Refer to in JSL?”, The 5th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics, September 25, 2016, National Museum of Ethnology, Japan.
- 原大介・黒坂美智代(2013)「日本手話の文末指さしが指し示すものは何か」.日本手話学会第39回大会(三重大学)口頭発表.
- 市田泰弘(2005)「手話の言語学(6) 空間の文法—日本手話の文法(2) 代名詞と動詞の一致」.『月刊言語』34-6: 90-98. 大修館書店.
- 松岡和美 (2015) 『日本手話で学ぶ手話言語学の基礎』. 東京:くろしお出版.
- 岡典栄・赤堀仁美 (2011) 『文法が基礎からわかる日本手話のしくみ』. 東京: 大修館書店.
- 鳥越隆士 (1991)「日本手話の文末の位置について」.『手話学研究』12: 15-29.